



蘇高陰高鑑

初編

三





巖島扁額縮本初編卷之三

目錄

三十六歌僊之圖

玄德躍馬跳檀溪之圖

瓜茄子豇豆之圖

張飛之圖

福海壽山之額

龍之圖

猿乘鹿之圖

文王得太公望之圖

壽老人之圖

龍之圖

虎之圖

鳴門海月之圖



關羽之圖

驕馬之圖

杯之圖

神馬之圖

鐘馗之圖

直實敦盛之圖

渡邊綱斬鬼女臂之圖

獅子之圖

初編卷之三目錄終

嚴島扁額縮本初編卷之三

藝陽 千歳園藤彦著

○三十六歌僊之圖

堅二尺余 横一尺五寸

本社組入左右不掲

永正十二乙亥春古法眼元信畫歌々山崎宗鑑書凡と額のうら
書不明あり元信の傳々みふらん宗鑑多々支那氏名を範光一夜
庵字号は俗稱彌三郎江州の人佐佐木の黨あり連歌おらひ
書をよらんゆゑ不足利家よりくへて恩澤ふ浴はのち雑髪一
て城南山々まきのちゆきこみ居はるのゆひ蹟ひまらありあつとくはく
西國ふ遊歴一みやこに歸るまらしく讃岐のくら琴彈山の邊に止まて

一 表 裏

大明神 為傳南は諸為人祈也 永正拾三年三月吉日

元作画之



本社組入左右小掲 堅二尺余横一尺五寸

か
小野小町
ふりかへし
はなをか
けり

山崎宗鑑筆



○今こそふらふら歌仙の四圖中入ふりかへし山崎宗鑑の書ふれり古びてまじ
ふりかへし一圖を左に臨寫してその書風をつぎつづるべし



假ふ居をいりて一夜庵と号は庵と今寺とありくも存せり寛永二
年乙丑十月二日没は齡幾年といふも審はしれは

辭世

文能とどらへ人の向ふらむと用ありくめせくといふ

此繪馬世も名高く聞えぬまごも惜むまごれ年經と潮風は晒され
總も地書のを残りて鮮明も見えざりはれも筆意絶妙あるは
てらに其四五枚を摸寫し出して諸君子に志せられたる

○柿本人麻呂姓氏録に柿本朝臣の大春日朝臣同祖あり天足彦國
押人命の後あり敏達天皇御代家門に柿本ありて柿本氏と
人麻呂も父祖も官位もあれども萬葉集に三柿本朝臣人麻呂
石見國に在りて死ふ臨とありて持統文武の御世の人あり六位あり
まぎらべり○古今集に柿本とありてのくらめとありといふに三位

已上をを薨とひひ五位已上を奉と云六位已下を死と云ふとあり

○山部の赤人天武天皇十三年山部連に五十氏姓を賜て宿禰と
いふをとり古今集序に山の谷の赤人とありて山部宿禰山の
邊に真人ふれを異なり續日本紀に延暦四年五月天皇の御名に
あれと故ふ山と改られりと山邊をを改りて異氏ふれを赤人の父
祖ともいふなり一萬葉集に元正聖武の御世の人ありとあり

○小野小町小野とて姓氏録に小野朝臣の孝照天皇皇子天帶彦
國押人命とありて大徳小野の朝臣妹子近江國滋野郡小野村
に家にとりてもの氏とありて小町近江國の小野村の人あり父祖
も志れど小町の諸國郡司の女姉妹姪との容貌あるもえらびく
貢を采女とふれを小町とありて小町といふとあり

奉懸玄徳之圖

文化八年辛未土月 京都官島講中講元

若狭屋七兵衛

平賀
楠亭



總金地極彩
色

大宮西廻廊南向三掲

欄
七尺

○僧正遍昭僧正しんせう職原抄しやくげん不ふ參議さんぎ不ふ准じゆん○遍昭へんせう俗姓ぞくせい右近衛少将良岑朝臣宗貞みよこ安世やすよの子こ文德天皇實錄ぶんとく嘉祥三年三月左近衛少将良岑朝臣宗貞出家しけして僧しゆとなり云々
三代實錄しゅう元慶三年十月權僧正けんしゆとなり仁和元年九月僧正となり云々

○玄德躍馬跳檀溪圖

豎五尺 横七尺

本社廻廊西寄南向小掲

文化八年辛未十一月楠亭畫 楠亭なんてい西村豫章よしむら字士風平安の人あり

玄德げんとく照列せうれつ皇帝てんてい姓劉名備字玄德涿郡の人之後漢の獻帝建安二年けんてい豫州の牧ちかとなり同十三年左將軍となり二十四年庚子

自立して關中王となり此年漢亡明年辛丑に帝と稱し章

武と改元となり 日本神功皇后二十年しんこう

○玄德を常じょう母ぼにはりへり孝を盡し履を售うり蓆せきを織オリて家業となり身の長七尺五寸左右の手膝を過す又關羽張飛と三人桃園に義を結むすんだ兄弟あにいとなり黃巾の賊を破やぶり軍功ぐんこうありて豫州の牧に補おせられり叔曹操となりもの漢の天下を奪うばんとするを惡にくみ義兵となりあら當陽の長坂波なみふ曹操と戦たたかひ不執ふせつにして打負うちまかて荊州の劉表りうひょうを頼たのみたりふ劉表弟と稱なづけて襄陽の新野城を守まもりむ劉表病の故ゆゑ荊州を讓ゆづらんだとなりも玄德げんとくはなげなげ劉表の妻の兄蔡瑁さいまうとなりもの國政を專せんにも劉表玄德げんとくを國を讓ゆづらんだとなりも間ま玄德を置おくら後の災わざはひとなりむ蔡夫人と計はかりて襄陽の會あひまひを催もよほす

一玄徳を招きりつゝ玄徳は何ぞんあくる来り蔡瑁志をきりたりと
悦び酒三巡ふかふよき伊籍よよもの盃をさうて玄徳の前ふた目
くむやして衣を著替りていひんを玄徳そのころを悟り厠へ行く体
もてふし出らんを伊籍私語りて蔡瑁君を殺さんとて城外三方ふえ
多勢を伏置り唯西の門をう檀溪をのりて伏勢ありての道
より落ると告ぬ玄徳悦び的慮し馬に乗る檀溪を望りし
白浪天小漲り渡べきやふ後を見らん敵軍を背にあら
を馬をさりと打入馬の首をたき了る努力をよめとまをよめ
馬たちまら一躍三丈飛り西の岸ふのぞき玄徳は茫然として雲き
その中をゆかしく危き難を遁りてうい後ふ蜀の皇帝と成
り云々

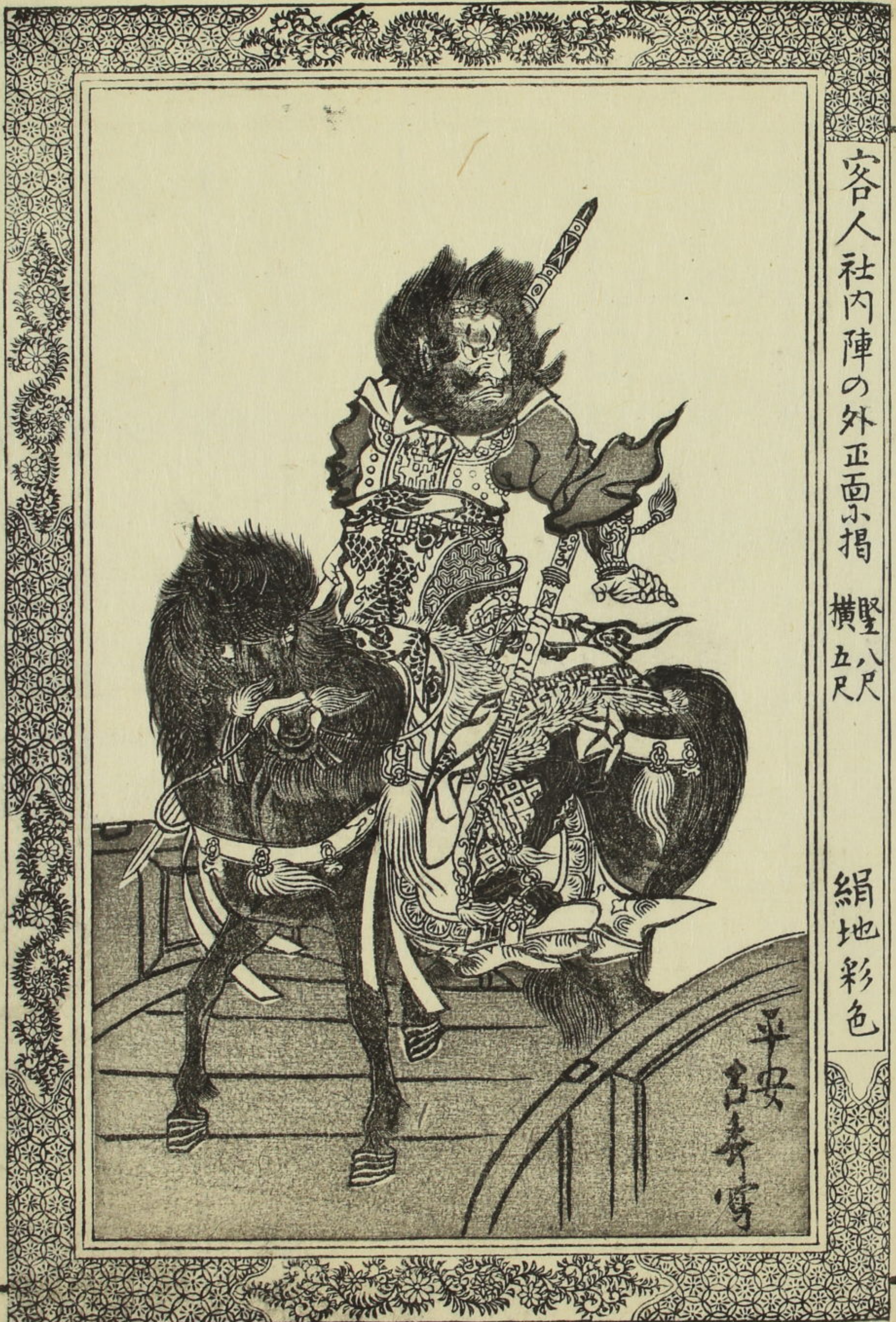
○瓜茄子豆の圖

堅一尺余 横一尺半

客人社組入に掲

元禄六癸酉年六月十七日狩野久太郎筆 畫系未考

此瓜の甜瓜なり。禮記に云天子の為瓜を削りこれを副
て中ふ締をとつと國君の為瓜を削りこれを華て中ふ給をわく
と大夫の為瓜を削りこれを累ふと士を削りこれを賣度人の削り
○時珍云甜瓜の味諸瓜より甜一故ふひとり甘甜的稱を得り
云々○濃州の本巢郡真柔村是甜瓜を作出し始あり
茄子の釋氏切韻ふ云茄子一名紫瓜子○時珍云茄子一
名落蘇○和漢三才圖會ふ茄子の白きもの味美からる黒
きものこれふ次ぐ紫からるもの最佳云々



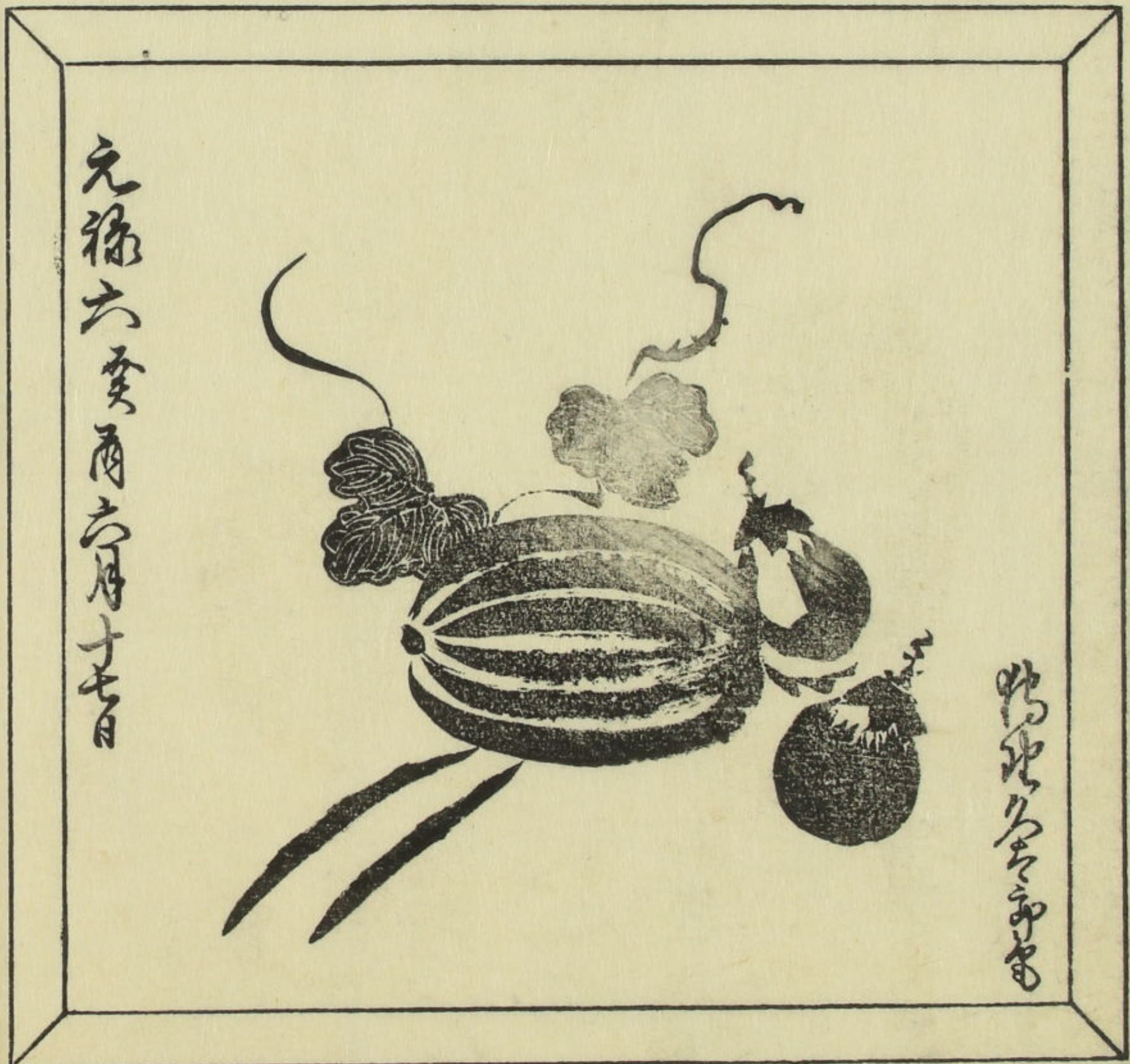
客人社内陣の外正面掲

横八尺
竖五尺

絹地彩色

平安
呂安寫

客人社組
入小掲



元禄六年六月十七日

物此乃名物也

竖一尺余
横一尺半

おもしろいわきの数うけまをてよえうとてけり一揃ふやい

豎豆救荒野譜云豎豆長きもの二尺ふ到るを裾帯と名
みぢきもの尺ふやをん鬺豎とあけく。崔禹錫が食經云大
角豆一名白角豆色牙角のど一故もろく名とれ其一殻ふ數
十粒を含む離々として房を結ぶ

○張飛之圖 豎八尺 横五尺 客人社内陣の外正面に掲

古秀畫 古秀字士瑩又希賢と號け俗稱八田宮内京師人
年号月日圖中ふこれあり

張飛字翼德涿郡の人身の長八尺豹頭環眼燕顔虎鬚聲
ハ雷のどく勢い奔馬の侶より一丈八尺の蛇矛を造り

長坂橋の戦ふ只一騎橋の上馬を立丈八の矛を横へ盛を脱で鞍
の片頭の髪倒ふ上りて獅子の怒毛のどく眼を逆ふ裂て光百練の
鏡ふ朱をそぎ怒もる鬼鬚左右ふ分れ悪鬼羅刹もこれあり
争ふれをどく見えふ曹操が陣ふ向ひく眼を怒ら一大喜揚音
燕人張飛あり誰も来て勝負を決せんと呼もる其聲雷の鳴が如
ありられを曹操が陣大に驚き俄に旗を隠し傘蓋を收め身を
を見ろ又眼を怒ら一大呼てふ戦ふも又戦ふも退も退け
と叫ぶ音未絶もるふ曹操が傷ふありゆ夏侯覇ふひ怕て魂
ひを失ひ馬より倒ふ落りれを曹操馬を廻し退よとつへを數十
萬の兵山の崩もどく推殺され踏もあされ手足を折も其數
をたしれ曹操も馬を飛し色を失ひ跡より御方の来をも敵

大宮正面
舞臺の
上掲
堅五尺余
横二間半

會保戊申

福海壽山

福海壽山

正月吉辰

福海

うとちひひげ退らると云

○福海壽山之額 竪五尺余 横二間半 本社正面組入の外掲

享保戊申正月吉辰蒙所筆 蒙所々興氏名光鐘字中連俗稱新
興文次蓮池侯の臣大坂ふ住もとの書唐人ふ倣ふといふを母
別ふ一家を為尤篆書を善以實ふ近代の能書あり浪花書風
これより一變をも實曆中ふ没以

○龍之圖 竪九尺 横五尺 本社内陣南向ふ掲

文政十年丁亥十一月吉日伊川院法印藤原榮信筆

龍のこと後ふ出ん

○關羽之圖 竪七尺 横三尺五寸 客人社正面脇廻廊ふ掲

文化十二乙亥十一月五岳筆 五岳ハ福原氏名ハ元素字子
絢通稱大助備後尾道の人大阪ふ住も大雅堂門人

關羽字雲長解州の人漢昭烈帝ハ蜀劉備たり時仕て
勇あり寐るに床を同して兄弟の約をまを江南の諸郡を収て
前將軍ふ拜せり世ふ虎臣と稱も終ふ呉孫權がたふふ襲ひ
殺さる大明の萬曆年中封トく守極協天上帝とも云或云
關羽身の長九尺五寸髯の長一尺八寸面ハ重棗のどくせり
美髯公と稱も劉玄徳の義弟之玄徳ハ巴蜀を取て關羽ハ荆



福永素画

文化十二乙亥十一月 願主尾道 長江連中 客人社廻廊 横三尺五寸

文政十年丁亥十一月吉日

大宮内陣南向三掲

横九尺 竖五尺



伊川院法印藤原榮信筆

長

州の太守とて呉孫權荆州を取らん爲計て關羽を呼寄帷幕の
中へ精兵を伏忽不殺さん若多勢来らむ呂蒙甘寧鉄炮を以
て一度不打出悉討ぞと陸口の塞外臨江亭不會宴を催し
書簡を荆州へ使りたり關羽を書を見て明日必行べいと云
はれを其子關平を始め馬良等とも不諫め令君千金の重き身
を以て輕くして虎穴不陷ぬ魚魯肅が會宴をあらす惡心あら
んとて關羽が云吾れを去るまじきや陸口不伏勢して吾を擒
みと荆州を掠ん爲く行ざらん臆むるに佞たり關平に船手の
精兵五百人と早船十艘を此方の岸不待せぬべし若旗を
もつてまわくを見を早く船を飛して来ふべしと關平父の命
不隨ひ北の岸不出れを關羽を八十二竹の青龍刀を周倉あり
持て江を渡り魚魯肅次の日遠見きやに紅ら關の字入らぬ
ちり關羽を緑の袍を周倉とて面は蛟の如くぬ男千竹をも
上り大力青龍刀を取て相續く躍り上りて魯肅出むるに
禮を不し臨江亭不入り拜伏して仰ぎ見ると能く酒半酣不至
て魚魯肅が不むし劉皇叔曹操攻破られ時我主人孫權其
憂を救ひし時の約ふむき今蜀の四十一州をどうゆら荆州を
渡りむるに枉ら領せんとも關羽が不ぬ兄弟の事ありて某
が知所ふあらぬ魯肅が不昔桃園を義を結ぶ兄弟共生死乃
交を誓ひたり人を劉皇叔が即足下あらばやと詰られ關羽言
ふく忽ち色を變り彼青龍刀を提るれを國家の大事あれを酒後
不論をべらばと目くをせしを周倉其ころを悟りて岸不出



寛文

金地彩色

寶前

揮画筆

大宮内陣の奥小掲

竪二尺五寸 横三尺五寸

紅の旗をとりて招けを關羽が勢矢の如く東の岸に馳來る關羽を青龍刃を右の手し魯肅が臂を左の手し引摺りつゝ酔々躰ふりかへ御邊と是非を論じて故舊の情を破らり他日荊州を請じて一會せんと小兒を提もどくは岸のなりぬ出えを呂蒙甘寧も若討て出で魯肅が殺せんとを怕れ更ふ兵を制して出で關羽が船を順風に乗とて去るを魯肅も計終ふあらざるを共本陣より孫權も斯と告げ終り荊州を攻んとを議りれを曹操攻來ると聞てまは是を防ぐ事を計きこ

○驕馬之圖

堅二尺五寸 横三尺五寸

本社内陣の奥に掲

寛文年中狩野探幽畫 探幽をたづめ采女と稱を守信の事之法印位不叙と孝信の長子に丹青の妙世の知所なりて狩野家のとあらは海内の畫風士の法印より一變に今に至る其粉本を準的といふ壽七十三歳延寶中没

此繪馬人口不膾炙をといふもそれより今ありは今年予適見當まり先年より神前常爐の上に掲て積年松菴の煤けり圖面どに分ごし去る由ふや前輩これを外に掛へ新調の額をすれ何と掲ぐ然るふの額煤をすひ見ると守信の筆ある事炳焉因るすなわして古のどく奥ふけらば蓋寛文の二字と名字のとあられり餘を志けり又客人社に富士の横額あり是を風雨り損下て落ぬ今巻て藏先らば原後編ふれを出ん

天明四之春三月吉旦

蒔繪師 京都 細野仙助

指渡之四尺余
深之六寸五分



願主
京都 廣島 人名畧之

○杯一器

指渡一四尺余
深六寸五分

本社廻廊東中央南向小掲

天明四之春三月吉日蒔繪師京都細野儀助

杯盃坏（い）本朝（ほんちゆう）の坏（くわい）は久（ひさ）の瓦器（わがき）をもちふ城州（じやうしゆう）深草（ふかぐさ）より出
るもの佳（よ）く河州（かじゆう）の龍目（りゆうめ）も次（つぎ）日本紀（にほんぎ）に神武（かむ）天皇（てんかう）香久山（かうきやま）の埴土（はつち）
を（を）りて平（ひら）冠（かん）を作（つく）りし神祇（しんぎ）を（を）まじりしとあり今（いま）も神
酒婚儀（しゆこんぎ）の嘉祝（かじゆ）もみ瓦器（わがき）をもちふ破身（やれま）を（を）ひ（ひ）尋常（よのじん）
ろ木杯（きばい）をもちふおちろと朱塗（しゆぞ）り（り）鐔（た）み知（ち）と描金（かき）撒金（さ）寺（てら）も
たゞ美（み）ありその大（おほ）あを武藏野（むさしの）と名（な）はちちと織部（オリ）とあり
其餘（その）數品（すうひん）も（も）一（い）一（い）

萬葉

さつぎに杯のむけけりしものちちぬる

坂上郎女

已上事物紀源等の説を撮或説に瓦器をもちふ一故酒土器とあり
恐く非ありまへく飲食を盛物を和名に高（たか）杯（ばい）食（じ）坏（くわい）酒（しゆ）坏（くわい）等（ら）の
いん同義あり

○神馬之圖

豎九尺
横二間

本社内陣東側小掲

年月日をもけ見を但一文の一字あらも

狩野左近（の）華（は）左近（の）宗心（の）種永（の）孫種次（の）なり永真（の）探幽（の）主馬（の）
三人を指南（の）功（の）わりと代々（の）狩野氏（の）名乗（の）を免（の）と一本（の）六
永徳（の）二男（の）貞信（の）養清（の）と号（の）一二十七歳（の）没（の）右近（の）孝信（の）兄（の）なり

大宮内陣西向掲 豎九尺横二間

宝前

京都

金地彩色

文

加納甚右衛門
藤田又四郎
古川甚兵衛
西脇甚右衛門
神波甚長兵衛
津見甚右衛門
吉見又右衛門
村田長左衛門

狩野尤近筆



此神馬の畫もむら世ふひ傳ふと入つてあつて毎夜繪ゆけ
しく向ひ地さうり田畑を喰あらあふいと夜々社頭ふ出て蹄と
あら一人をりわらうらむらとわらう中畧をりく胴と足とふ釘
もうちはけりるを終ふ出づりいとをばれを古より諸名家の畫
史馬傳の秘事よく叶たりとく寫入るもふあり

因ふく繪馬とてむら神馬を奉りて後世畫く獻ふ事とてまを容
易を便とてむらむらけりる人物花鳥等の繪を獻ふと又のち始りあべ
巖島明神へ馬をいへて古書にぞく見えり今も太守君御年賀寺乃
みより大宮客人の兩社へ神馬を奉獻しとて古も異あら然るに寛
弘年間色紙繪馬の事本朝文粹あり又當國賀茂郡津江村八幡宮に奈須

此市か奉納の繪馬とてあり神馬の圖作者何某今神主内田飛彈これを所持はれを
上は代も繪馬ありあべ但繪馬は兵士花鳥などば畫奉るとい餘
を後世の世の事や當社數千の繪馬はも古畫はも見えれども年次の的
然と見れり永正天文とてむらむらとめりる原とのむらとてむらむら

○鍾馗之圖

豎七尺余 横六尺余

客人社組入の外奥向ふ掲

文化六年己巳正月吉日藍江中直寫 藍江畫系第百廿四故とる畧

傳云唐玄宗皇帝ある年の正月瘧病をむらむら臥ふ夢ふ一小鬼
らら虚耗と稱し玉笛をぬらむ時ふいらの大鬼来て小鬼を
捕へるを啖ふ皇帝夢のむらむらこれ名を問ふ人を對てきか

客人社組入外二掲

横六尺余
豎七尺余

文化六年己巳正月吉且

金地彩色



吳道子原圖
廿盤江中直寫

惠美貞秀拜具

版工山田和助
浪花嘉助彫

臣終南山の進士鐘馗あり高祖の武徳年中に及第せざるを耻て
階子あつれ死せしむるに袍帯をむらうて葬むるの息を報せん為に
誓て天下の虚耗の鬼を除くは皇帝の免覺る疾瘡をぬるは
道士ふ命とく其圖を寫す先天下ふ傳へしとあり 事物紀原
○鐘馗の説多し今畧し或人のいふは所ふ吳道子の畫に鐘馗の圖あり
眼一ふちぐれ皇帝の免見ふと云ふ今この圖鐘馗の大あひやく
鬼の一眼をぬり鐘馗の眼一あり是作者の發明ありん

○直實敦盛之圖

堅三尺余 横二尺余 本社大床ふ掲

天正五年十一月吉日 備前國住人吉永彦宥丹覺畫 丹覺
畫系いまい考へ

壽永三年三月一の谷の軍破れしを源氏の侍武藏國の住人熊谷次
郎直實平家の落人の中ふとき大將軍をも討留むやと渚の方に出
れば平家の大将冬議經盛の末子無官の大夫敦盛の煉母貝に雀
縫する直衣ふ小櫻威の鎧着て鍬形打する甲の緒をきめ金作の
太刀を帯二十四指する切生の矢負ひ連錢葦毛の馬ふ金覆輪の
鞍置く乗く出沖する船ふ乗移んとて海ふらとち入るふを
熊谷あはれよれ大將軍と見まいらむる返さむ人と扇子を揚て
招くわくわくし浪打際やら上りあつるを熊谷推し立て無手
と組むと落しめ押て首を搦んとする所ふ内甲を見まを薄
化粧ふ鉄醬黒く容顔美麗の公連と見まをり我子
の小次郎が齡をわく十六七歳と見まを熊谷俄ふ心弱しとい

天正五年十月吉日



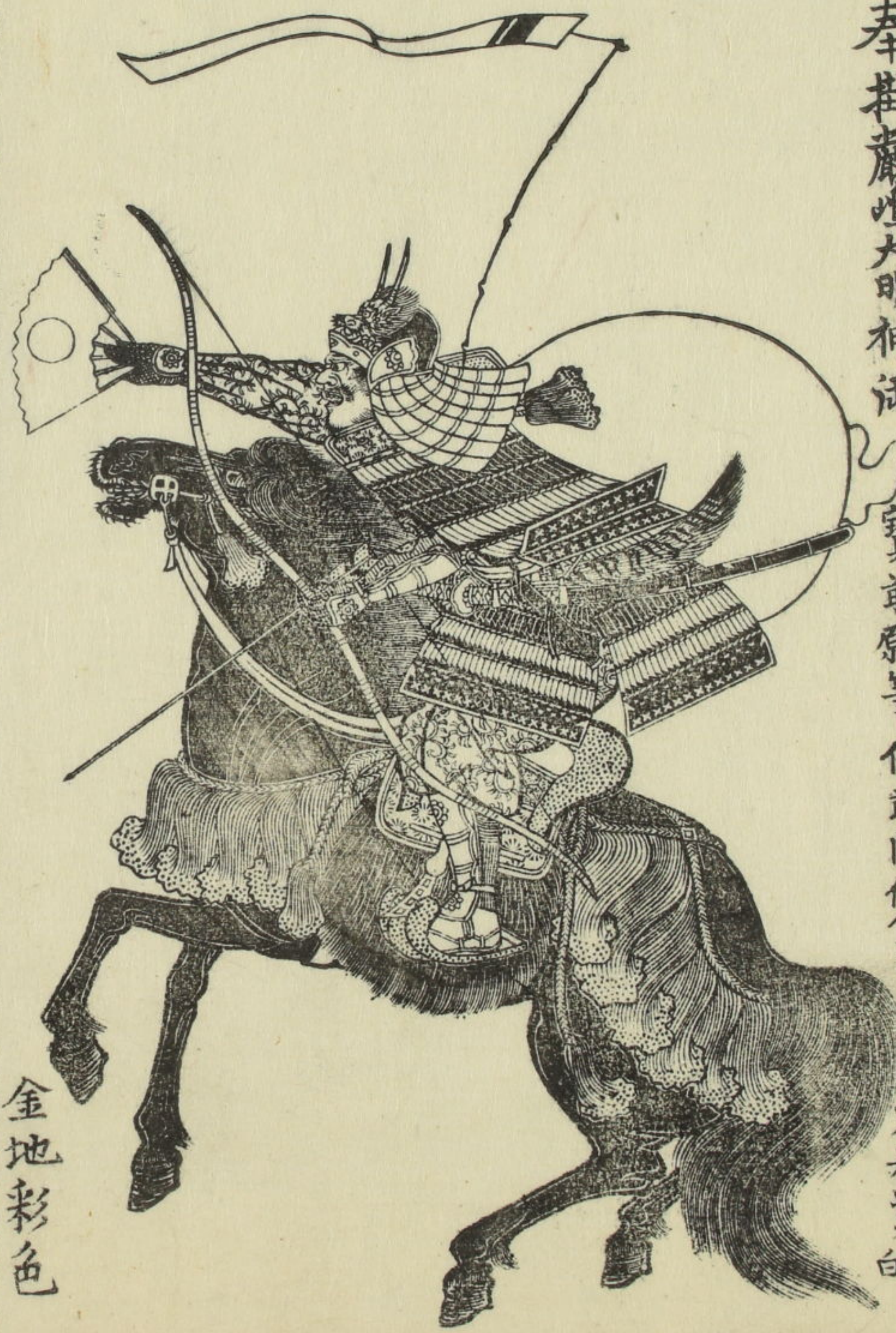
同

大宮大床小掲

横 三尺余
二尺余

奉掛巖鳴大明神御

寶前願筆備前國住人吉永彦省丹覺敬



金地彩色

ふもして助きのらやとやとやふもけり中々味方の軍勢満くこれ
迎ものれむとやとやふもけり中々味方の軍勢満くこれ
りる詮方なく涙ももれ終ふ首を搔りたり扱首をむ包り
父経盛のもも贈りものも熊谷を誅心して蓮生と名を改め敦
盛の菩提を吊ひたりとやとやふもけり中々味方の軍勢満くこれ
平家物語 撮要

○猿栗鹿之圖 堅四尺余 横三尺余 本社廻廊長橋ヨリ行詰掲

年号月日圖中不見る祖仙齋畫 祖僊森氏守象叔牙靈明庵の
號あり浪華の人

此圖鹿の角に牡丹花を附り晩春より初夏にかけて牡丹花のるる
鹿ややく鹿茸をみる季節はひまをみるに似れども畫法より

事あるべし

因云和漢三才圖會云ふ本綱狢狢狢狀貌人ふ侶と眼愁胡の如く頰陷
ふ喙あり喙と食を藏ととるく腹小脾胃一行を以て食を消ととるく又
云厩の中母母猿を畜むと馬の病を辟く故に馬留も名くと紀州岸
の甚兵衛猿引の始ありと下畧。鹿の事を前ふ出れ

山つとくくゆき後まゆの枝まのりたひくると 慈圓
ゆきまゆき桶の枝まのりたひくると 顯仲

又云巖島鹿鹿の多きととて毎年猿の荒るとを猿狩あり
了く男子分其役ふく猿を捕へて役所へ引むる地へかくらるる追
鹿を明神のはくく別ふるとを愛たり鹿をとるもの追
放ちく定法あり

大宮廻廊長橋ヨリ行詰掲

横四尺余
横三尺余

願主 本森祖仙亦用



權陽江重者森祖仙齋圖

取次竹本文大夫

英公刻

○文王得太公望之圖

豎五尺
横八尺

廻廊能舞臺の前掲

文化十三年丙子三月文晁畫

文晁を寫山と号し俗稱谷文五郎

江戸の人

文王を周文王西伯名昌殷の紂王二十年壽九十七ふと薨トシ太
公望姓を姜名ハ呂尚字子牙又飛熊を號し歳九十ふて率太
公望を殷紂王の時世を治け渭陽を所漁を文王を田
終ふ太公望を得たまはれ天より吾ふ師をのふとるくと文王の
御輿のせをのらつり人師官をのらつり武王を佐
紂王をのらつりの功をのらつり齊を封をのらつり魯をのらつり都

謹懸廣前

文化十三年丙子二月

關藏人忠親



迴廊能舞臺の前掲

堅五尺
横八尺

文化十三年
三月文島繪



金地墨画

客人社内陣ふ掲 豎四尺余横三尺



寛永七載陸月吉日

金地彩色

○壽老人之說前不見寛永七載陸月吉日筆者不知この圖

常爐の上ふ阿れが煤けく分ごとくふへとも年へて其見る所筆意
ふ妙りりとしてさくふあらせん

○龍之圖 豎九尺 横二間

本社内陣正面脇ふ掲

文政元年戊寅九月替替拜具狩野大藏卿法眼洞白愛信畫

龍と説文ふいしく鱗蟲の長あり廣雅ふ云鱗あると蛟龍といひ
翼はると應龍といひ角あると虬龍といひ角なきと螭龍といひ
いまふ天ふ小升ふらふを蟠龍といふ本艸綱目ふ云龍の形ふ九似あり
頭を馳ふ侶ふく角を鹿ふより眼を鬼ふ侶ふく目を牛ふより
項を蛇ふより腹を辰虫ふより鱗を鯉ふより鰓ふを鷹ふより掌を
虎ふより背ふ八十一の鱗あり九々の陽數を具ふ 下畧



本社内陣正面取掲 竪九尺 横二間

野大藏御法眼洞白息言畫

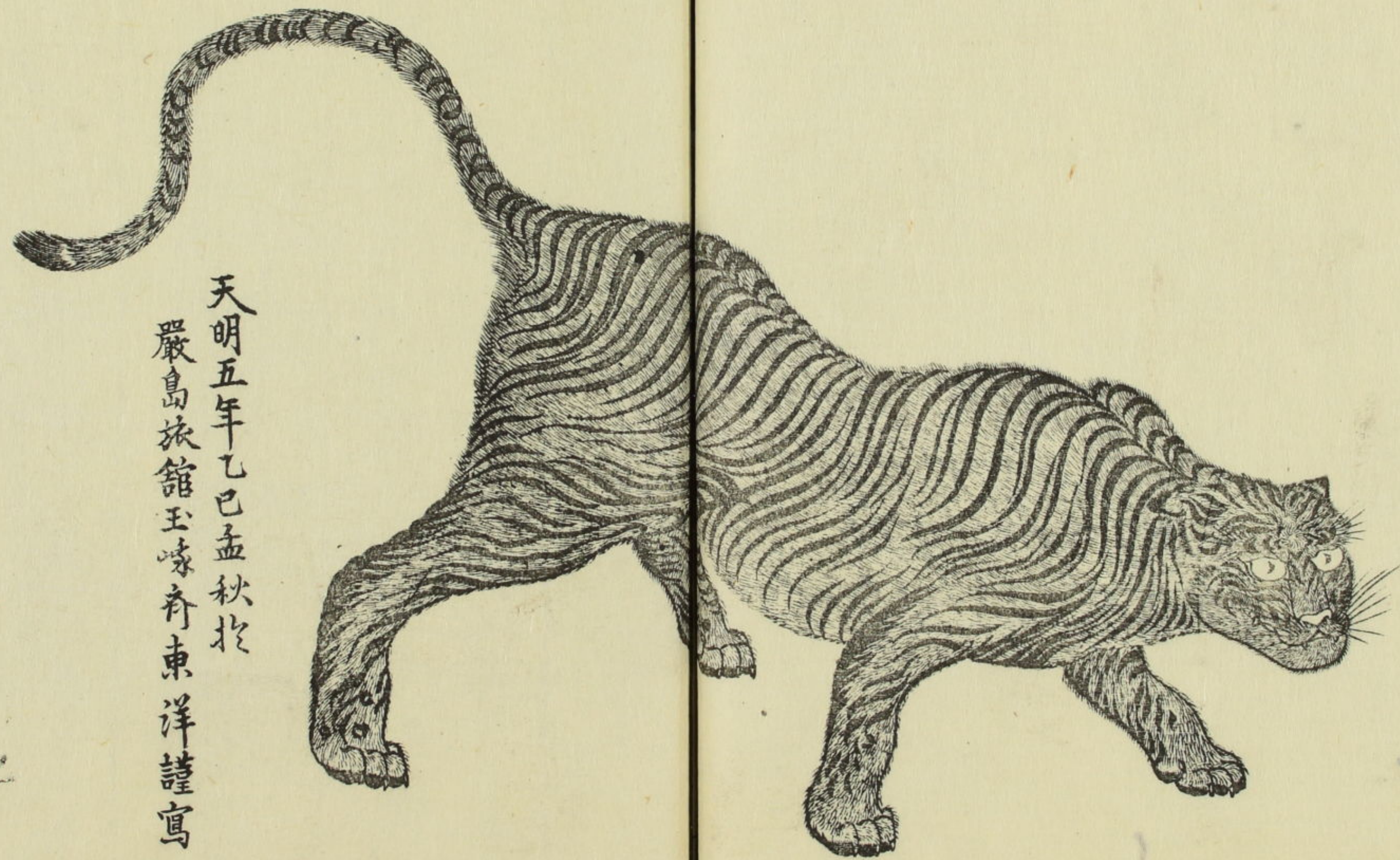
奉寄附
御寶前

文政元年戊寅九月稽首拜具

金地墨画

大宮廻廊長橋之在

豎三尺余
横五尺余



天明五年乙巳孟秋
嚴島旅館玉味舟東洋謹寫

金地彩色

彫刻氏山口宗五郎
工名護屋伊三郎

○虎之圖

豎三尺余
横五尺余

迴廊長橋とらふ掲

天明五年乙巳孟秋於嚴島旅館玉城齋東洋寫東洋字大洋京師の
人この圖もと長崎ふく寫生はと云

虎と説文ふ山獸の君云格物論云虎の形狀猫のごとく大黃牛
みひく黒章釣凡鋸牙舌の大さ掌のごと倒し刺鬚を生け硬尖ふ
いと夜とるひりり一目光をはち一目ふ物をみる獵師候く
さふ射みくり地ふ墜聲雷のごと百獸を為ふ震ひおそ風
み從て生べといるり本綱みふ立種虎始て嘯き中冬始て交む或
云月ふ暈あるときとら交む又云虎と再び交まれば孕て七月
ふして生る中畧虎狗を喰ふ時と酔ふ狗とをら虎の酒へ羊角
の烟をきくと去る其臭を惡て云

万葉集

かゝの虎の形は山と云ふに似たりと云ふものもなきは

○鳴門海月之圖

豎九尺
横二間

客人社内陣南向ふ掲

明徳辛卯年十一月穀旦藤原惇則圖 惇則ハ廣陵府下の人勝田
友溪と稱を松翁の弟子

鳴門を阿波の國あり大鳴門小鳴門あり海上第一の難所あり
といへり

その中をわたりて今ぞ阿波の地なる浪丸もあ
修むとされ修むの澳ありともなるとりけりとの海士舟か

因云後光嚴院の朝康安元年大地震七月二十四日阿波の鳴門俄み
潮とくまらりて陸とぬる相傳てふこれ時ふ岩の上ふ周二十尋ばかり

客人社内
陣小掲
取五九尺
横二間

奉寄附御寶前嚴肅整齊誓首所

明和辛卯年正月穀旦

金地彩色

藤原時國圖



太鼓を見し鱗と石面と水牛の皮巴の紋を畫銀の泡頭釘をくわく
らんをみり人大きおぢるき性くろぬくをくつふ大なる鐘木をくわく
鐘とけくかどくはん其聲天ひきき山と成と潮湧て人ん出まると怪談と
いふあり

月々徐整長曆より月の徑は千里周圍三千里天より下りて七千里
春秋元命苞より太陰の水精月とあり物理論より月ハ水の
精より潮ふ大小あり虧盈あり云々釈名より月ハ闕あり満をを缺く
下畧

○渡邊綱斬鬼女之臂之圖

堅二尺余 横三尺

客人社廻廊正面脇に掲

享保二十一丙辰正月吉日青柳軒畫通稱をいへり崎陽人

此圖は天延四年四月十日の事ありり源頼光のいふと冷泉院
の判官代をり一時一条大宮ある中納言維仲卿の息女垣間見
やと架つらふき中とありつひお程なく上總守に任ざられ彼國
へ下りて年歴く昨日の晩ちど都にお上りつひお程なくともや禁庭宿
直子にさすられをいひゆふいとまをいへりあててさるる
おはり京家の子渡邊綱をたすひをふまゆ合りてぞ一条大
宮にけりるされり夜陰とみ浴中けりりし時節あるをと相
傳の鬚切を帯さるる綱も御忍の使あるを供さし具を唯
ころやとさき口挿のやと二人をいひ具しつりちかこに行
さきやとさきおしけり御よりどをいふけりりてぞよりり一条
堀川の尻橋を越りて時東風ふ二十歳をりの女紅梅の着

客人社廻廊正面脇小掲

横二尺余
三尺



享保廿一丙辰正月吉日

青柳軒画

阿湯坂東理助
全 筒井火助

み守をさけ佩帯の袖に經をもち人も具はるるひより南の方
みど行く綱を西詰とちかくよりやまびくつかきぬ人ぞと向けぬを
女をへくこれに五条巨り用のさぶらぎりに夜更やろふらふ
らへをゆくりわをりてんやとわれくくまをりぬを綱をろふやあや
此頃洛中怪異ありとて夜陰ひの往來をえくふ女の身とて唯
ひよりあふふふふ瘴ものごさめれ適すどもれをといふも
んで下しやまきとてこの馬りめされさつとひひれをうら
つまは馬ふららのり堀河の東を南の方へゆきんて親町へ
ひの一二段ぐらどらぬぬら所ふく女うろへ向まをりけり
誠に五条うらりみを用とさつらつらみやこの外ふさつらへとこれ道
ゆくりむをれぬを綱をあはとやまきとてらつづらまきとてと云を

まきてやうて姿を變ぬるき鬼とありていざ吾住處を愛宕山ぞ
とひまきり綱を警はんと乾の方へ飛行る綱を少もらとどぞ
件の髪類切をらりと抜さらば鬼の臂を斬る鬼を切ぬら
も愛宕山へひより行く綱を北野の社廻廊の屋根の上ふとと
落けるとどぞ下畧

○獅子之圖

豎九尺余
横二間余

客人社内陣南側ふ掲

文政元年戊寅九月替首舞具狩野大藏卿法眼洞白愛信畫

畫系前見畧于此

獅子の本艸綱目ニ云獅子の百獸の長たり西域ふ出状虎のどくあて小
一黄色赤金色獠狗の如く頭大く尾ふまき青色のものあり銅の頭
鐵の額釣の爪鋸の牙頭身昂き鼻もく目の光電のどく吼聲雷の如

容人社内陣北向二掲

竪九尺余横二间余

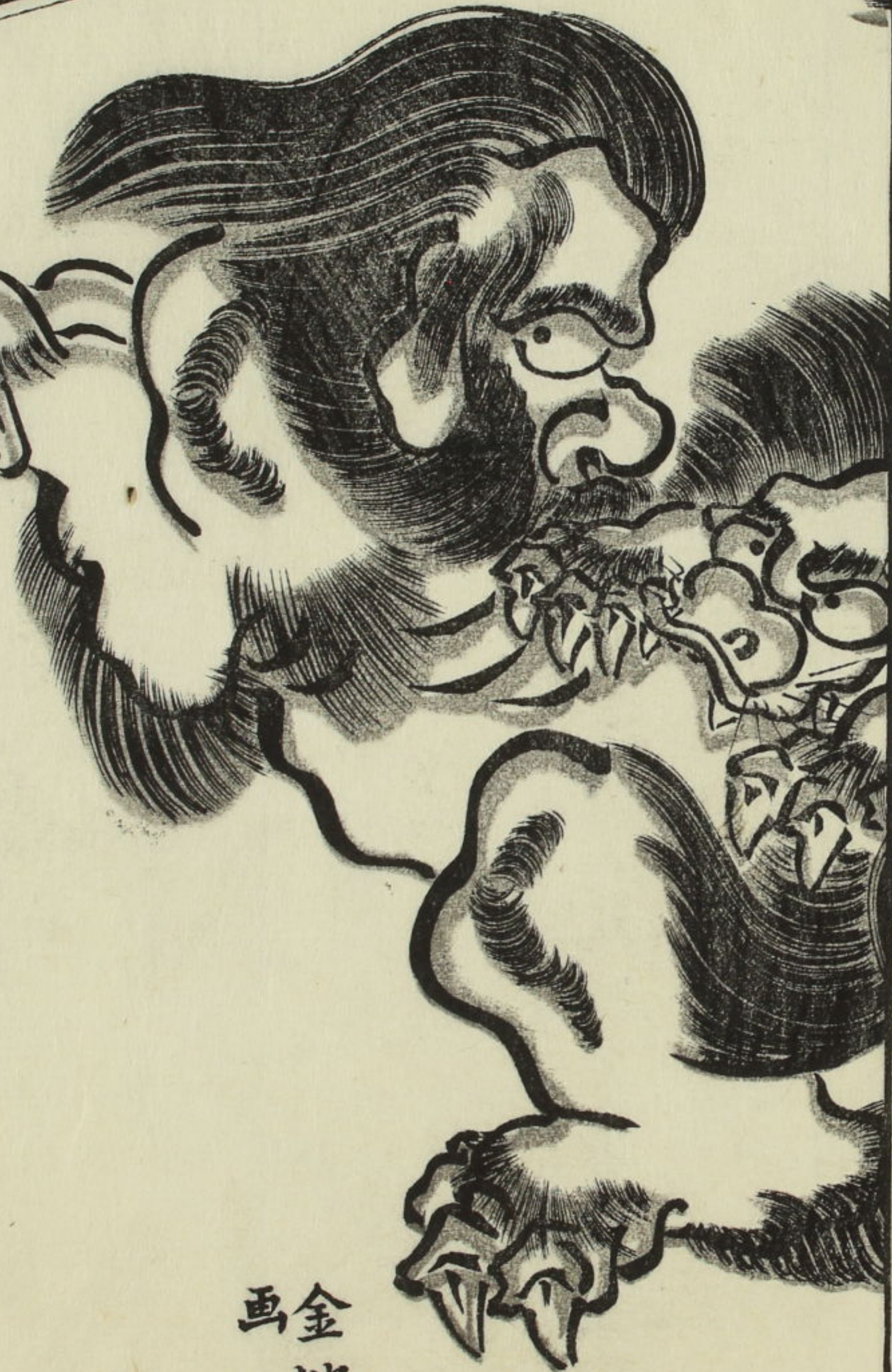
奉寄附
御寶前

狩野大藏御法眼洞白愛信謹画



文政
元年戊寅九月稽首拜具

金地墨
画



一 形鬚あり 牡の尾の上茸毛あり 大き斗のとき日不走ると五百里
 毛あり 蟲長入怒るとき威ひ齒ふあり 喜るとき威ひ尾ふあり ひと
 とく吼るとき百獸辟易し 馬の乳 瀧血を虎を拉ぎ 豹を吞
 屏を裂き 象を分く 其諸獸を食ふ 氣を以て是を吹き 羽毛粉
 のごとく 落つれば 毛を牛馬羊の乳の中ふれを毛と化して 水とあ
 死このちとていをも 虎豹あへく 食ふ 西域の乳を畜ふふて されて七
 日のうち 其の目を開くものとなりて これを調習とす 稍
 長とれを 馴く

位少し 其の世のいふこと 神のいふこと 人のいふこと 入 慈圓

嚴島扁額縮本初編卷之三終

